

## 「戦さは男の仕事」?

——『イリアス』第6歌におけるヘクトル像再考——\*

川島 重成

### (1)

「戦さは男の仕事、このイリオスに生を享けた男たちの皆に、とりわけてわたしにそれは任せておけばよい。」<sup>1)</sup> (『イリアス』 6. 492-3)

これはヘクトルが妻アンドロマケに、機を織るようにと勧告し、つづけて発したあまりにも有名なセリフである。機を織るのは女性の典型的な仕事であり、戦さは男性に課せられた固有の役目だというのである。このように『イリアス』において男の世界と女の世界は明確に区別されていた。この「戦さは男の仕事」は、『イリアス』成立後およそ300年を経た紀元前5世紀アテナイの民主政社会においても、特権的な男性の領分を誇示する標語として人口に膾炙していた。アリストパネスの喜劇『リュシストラテ（女の平和）』（前411年上演）で、男の仕事とされる戦争（政治）に口を挟む妻を夫が威嚇する啖呵として、この句がそのまま用いられている（520）。主人公リュシストラテはこのセリフを口走った夫に向い、さらに「戦さは女の仕事」（538）と言い放つ。このようなパロディが成立しえた

---

\* 本論考はペディラヴィウム会とICUキリスト教と文化研究所（ICC）の共催による第1回公開講演会（2014年10月4日、ICUダイアログハウス）での講演内容に多少の修正を施したものである。

1) 本論考における『イリアス』からの引用は、特記する場合以外は松平千秋訳（岩波文庫）を用いさせていただく。

のは、ヘクトルが発した「戦さは男の仕事」が、アリストパネスの喜劇を享受する一般市民の間に定着していたからである<sup>2)</sup>。

『イリアス』においてこのセリフを口にしたヘクトルはトロイア随一の英雄、いわば男の中の男であり、その妻アンドロマケは女の中の女として描かれていると見て、一応間違いではなかろう。にもかかわらず『イリアス』第6歌の有名な「ヘクトルとアンドロマケの語らい」の場をつぶさに観察すると、二人のありようは男と女の硬直した関係に終始しているとは言えないのではないか。ヘクトルの世界はアンドロマケによって、そして彼女に先立ちヘカベとヘレネ（とパリス）によっても、つまり女性的なものによって次第に影響され、浸潤されてゆくように思われる。実はそこにこの場面が古来人を惹きつけてやまない秘密が隠されているのではなかろうか。以下において、男の世界と女の世界の出会いと折衝という視点から、ヘクトルがトロイア城内に一時帰還し、再び戦場に復帰するまでの間に、このトロイアの英雄の男振りが次第に変容してゆくプロセスを辿ってみたい。

## (2)

ギリシア勢の英雄ディオメデスの輝かしい武勇譚が『イリアス』第5歌全巻にわたって展開され、それがさらに第6歌71行にまで及ぶ。苦戦つづきのトロイア軍の勢力を挽回するために、ヘクトルの弟で卜占の術に優れたヘレノスの献策により、ヘクトルは一時トロイア城内に帰ることになる。それはトロイア勢が「女房たちの腕の中へ逃げ込んで、敵の笑いものになるような振舞いをさせてはならぬ」(6. 81-2) ので、母ヘカベに重だった女たちを集め、屋敷の中で最も美しい衣装を女神アテネに奉納し

---

2) 荒井直「アリストパネス——『女の平和』における厳粛な茶番」、川島重成、高田康成編『ムーサよ、語れ——古代ギリシア文学への招待』三陸書房、2003年、219頁参照。

て、ディオメデスの撃退を祈願してもらうためであった。

ヘクトルはこの勧告を受けて、味方に抗戦を促しつつトロイア城へと向かう、大声で次のように叫びながら。

豪気のトロイア勢、またその名四方<sup>よも</sup>に轟く来援の方々よ、男子の名にかけ、勇気を奮い起して戦ってくれ、わたしはこれからイリオスへ戻り、長老たちならびにわれらの妻たちに、神々に願をかけ大贄を捧げまつると誓うよう申し渡してくる、その間をよろしく頼むぞ。(6.111-5)

先にヘレノスがヘクトルに託したのは、重だった女たちを集めて、女神アテネに祈願するようにとの母ヘカベへの要請であった。しかしここでヘクトルは「[……] 長老たちならびにわれらの妻たちに [……]」と言っている。母ヘカベの名が消え、「われらの妻たち」となっているのは、さしたる問題とは言えまい。これはむしろ、ヘクトルがヘカベへの申し渡しの役割を果たしたあとで、彼の妻アンドロマケに逢うことになるこの巻のクライマックスに向けて詩人ホメロスが置いた伏線と解することもできよう。

問題はヘクトルがここで「われらの妻たち」に先立って「長老たち」に言及している点にある。彼がイリオス城内に帰って長老たちに会うことは任務ではないし、事実としてもない。とすればこれは、重要な使命を帯びた一時の帰還とはいえ、戦場を離れるヘクトルの“男”の意識が、この「長老たち」の語を付加させたのではないか、彼は女たちだけの世界に戻るのではないと。これに先立って彼がわざわざ「男の名にかけ」（原文では「男であれ」）と言って仲間たちを励ましているのも、このことと無関係ではあるまい。これもまたヘクトルの「戦さは男の仕事」たる意識の現れであろう。

## (3)

このようにしてヘクトルはトロイア城のスカイア門と櫓の木の辺りまでやってくる (6. 237)<sup>3)</sup>。ここから武士ヘクトルと城壁内にいる女たちとの出会いが始まるのである。まず彼のまわりに駆けよってきたのは、わが子、兄弟、身寄りの者、また夫の安否を気づかう母たち、妻たち、娘たちであった。ヘクトルは彼女たち一人びとりに、「ひたすら神々に祈れ」(6. 240) とだけ応答する。

つづいてヘクトルは「磨いた石の柱廊を具えた、プリアモスの壮麗な屋敷に着く」(6. 242-3)。おそらくその戸口で、ちょうど娘の一人ラオディケを連れて、どこかから帰ってきたらしいヘカベと遭遇する<sup>4)</sup>。ヘカベは息子の手を握り、次のように第一声を発する。「倅よ、どうしてお前は激しい戦さを捨てて帰ってきたのです」(6. 254)。ヘカベは息子を非難しているわけではない。ただ思いがけないヘクトルの姿に驚いたのであろう。それゆえ松平訳の「戦さを捨てて」はやや訳しすぎであろう。原文をそのまま訳せば、「戦さをあとにして」ぐらいがよいのではなかろうか。それにしてもこのヘカベの驚きは、「戦さは男の仕事」が男のみならず、女の意識をも支配していたことを窺わせる。ヘカベはヘクトルの返答を待つまでもなく、息子が戦場を離れて家に帰ってきたことへの戸惑いを、母親らしい推測で打ち消そうとする。「きっと町をめぐって戦っている、その名も忌わしいアカイア勢が、わが軍をさんざん悩ましているのであろう。それ

3) ヘクトルがヘレノスの献策を携へて戦場を離れた後、スカイア門に到着するまで、原文の行数にして117行 (6. 119-236) に及ぶ時間が経過しているが、その間に「グラウコスとディオメデスの出会い」のエピソードが挿入されている。この有名なエピソードについては、川島重成「『人の世の移り変わりは木の葉のそれと変わりがない』——『イリアス』第6歌におけるグラウコスとディオメデスの出会いについての一考察、特にグラウコスの死生観をめぐって——」、『人文科学研究』43号、2012年、51-75頁参照。

4) Cf. B. Graziosi and J. Haubold, *Homer Iliad Book VI*, Cambridge, 2010, p. 40 及び p. 149 (ad 252 n.).

でお前もここへ来て、城の上からゼウスに手を差し伸べて祈る気になったに違いない」(6. 255-7)。この推測は半ば以上当たっている。ただし事実はヘレノスの献策に従って城内に帰ってきたのであり、さらに自らゼウスに祈るためではなく、ヘカベと重だった女たちに女神アテネに祈願するようにと要請するためであったが、ヘカベはただ母親らしくあくまでも息子の心情に寄りそい、一切をそこから納得しようとしていたのである。にもかかわらずヘカベのこの推測は、ヘクトルの当初の意図とは別の形で、この第6歌のクライマックスにおいて、彼の独り子アステュアナクスの将来を気づかうヘクトルによるゼウスへの祈りによって実現することになる(6. 475-8)<sup>5)</sup>。詩人ホメロスによって張りめぐらされた見事な伏線の一つといえよう。

このようにヘクトルの帰還の理由を付度したヘカベは、つづいて「待ておいで」(6. 258)と彼に語りかける。この行頭に置かれ強調されているフレーズ(原文では、ἀλλὰ μὲν')は、「さあ、(ここに)留まっていなさい」と訳し得る。少しでも長く自分のそばに居て欲しい、あえて言えば、戦場に帰らずここに留っていて欲しいとは、「戦さは男の仕事」の理念にもかかわらず、母親ヘカベの、いやすべての女たちの真実の声であった。そしてこれもまた『イリアス』のクライマックスたる第22歌において、一騎討ちを覚悟してアキレウスを待ち構えるヘクトルに向かい、ヘカベが城壁の上から涙ながら必死に叫びかける次の言葉の予徴となっていると見てよいであろう。

ヘクトルよ、わが子よ、[……] さあこの乳房をおろそかに思わず、それとともにこの母をも憐れんでおくれ。そういうことを思い出して、大切な倅よ、あの敵を防ぐのは城壁の中からするようにしておくれ、決して前に出て立ち向かってはならぬ。(22. 82-5)

---

5) Cf. Graziosi and Haubold, *ibid.*, p. 40.

もちろんヘカベはこの「待っておいで」に、第22歌の「(アキレウスと) 決して前に出て立ち向かってはならぬ」ほどの重い意味を意識的に含意させていたわけではない。しかしこれはヘクトルの(ひいてはトロイアの) 来たるべき運命を知悉している聴衆(読者)の心にエコーとして共鳴する。ヘカベ自身はここではただ「待っておいで」(「(自分のそばに) 居て欲しい」)との願いを言うために、次のような理由を咄嗟に思いつくことができたのであった。

[……] すぐに甘美の酒を持ってきてあげよう、まず父神ゼウスと他の神々に献酒し、その上でよかったらお前も飲んで元気をつけるがよい。疲れた時には酒が一番力を盛り上がらせてくれる。お前は味方を守って疲れているに相違ないのだから。(6. 258-62)

ゼウスに献酒するのはよいとして、一人で酒を飲むことは、戦場で戦うことと正反対の行為である。ヘカベは要するにヘクトルを少しでも長く自分のもとに留めておきたいのである。ヘクトルは次のように述べてヘカベの申し出を拒絶する。「いや母上、旨い酒など持ってきて下さいますな、力が抜けて戦う気力を失うようなことになっては困ります」(6. 264-5)。このヘクトルの言葉は、彼自身の内奥にも隠されている戦さをやめたいとの心の傾きと決して無縁ではなかったことを示唆していよう。ヘクトルはともかくも女の世界に帰ってきたのである。そのことが事実として男性的なるものに危機を招来しない筈はなかった。しかしヘクトルはその危機に辛うじて堪え、甘美の酒を味わって母のもとに「留まる」ことを退けたのである。

ゼウスに献酒することも、ヘクトルは血に塗れ穢れた体では憚られるという理由で拒む(6. 266-8)。しかし男の領分たる戦さの営みに従事してきた自分の体を穢れていると意識していること自体が、瞠目すべきことではなかろうか。女の世界に接するとは、男の世界にとっての危機であること

を、彼はこのような言い方で、しかし無意識に表明したといえよう。ヘクトルは男の生き方、男の価値観を相対化する決定的な場と時にすでにごく近くまで接近していたのである。ヘクトルは自らゼウスに祈るわけにはゆかない、だからこそ母上をお願いしたいと、ヘレノスの献策を伝える。ただし彼はヘレノスの名を出さない。もっぱらヘクトルの安寧を気づかう母ヘカベの気持ちに寄りそってのことであろう。ヘカベにとってヘクトルがトロイア城内に帰還した客観的な事情の詮索などはどうでもよいことを、ヘクトルはよく理解していたのである。

かくしてヘクトルはイリオスに帰ってきた本来の使命を果たし終えた。それゆえ彼はここで直ちに戦線に復帰してもよかったし、彼自身その必要を誰よりも自覚していた。それにもかかわらず、彼はヘカベに今しばらく城内に留まる理由を次のように語る。

母上には戦利を集めるアテナイエのお社へ行っていただき、わたしはパリスを探し、わたしのいうことを聴くようなら、ここへ呼んで参ります。(6. 279-81)

メネラオスとの一騎討ちに敗れて女部屋に、ヘレネのもとに逃げ込んだパリス(3. 340-448参照)を再び戦場に連れ戻すこと、これはヘクトルの帰還のそもそもの目的にはなかったことだが、十分に男の論理に適うことであった。しかしこれはパリスのいる女部屋(奥部屋〈タラムス〉)をヘクトルが訪ねることを意味している。(母親ヘカベとは、彼女の屋敷の戸口で出会っただけで、その中に入ることもなく、別れようとしていたのである。)パリスに面接するとは、ほとんど女性と出会うに等しい。それは男ヘクトルにとって異質なものの折衝であり、危機であるとともに、秘かな魅力であり、誘惑でもあったのではないか。ヘカベが生んだこの二人の息子は男と女ほどにも違った人間に育てられていた。しかし両者の根底に相通うものが流れていない筈はない。そのことをほとんど意識しないまま

に、ヘクトルはパリスとの来たるべき接触があたかも自己の生の根柢を済し崩しにするものであるかのように、次のような激しいパリス批判の言葉を発するのである。

ああ、この場で大地が裂けて、彼奴を呑み込んでくれたらどんなにかろう。まことにオリュンポスの大神はあの男を、トロイエの民、心広きプリアモスまたその子らにとって、なんと大きな禍いとしてお育てになったことか。もし彼が冥府の王の館に降るのをわたしが目にすることができましたら、ああこの胸もやっと不快な悩みを忘れることができた、と思うでしょうに。(6. 281-5)

これは、二人を生み育て、二人ともに全肯定したい母ヘカベの面前だからこそ発しえた言葉であった<sup>6)</sup>。ヘカベはこれに何も応えない。ヘクトルの苦しい内面の葛藤を察していたからであろうか。

ヘカベは早速屋敷に入って女神アテネに奉納する衣装を選ぶ。ヘクトルがヘレノスの提言を受けて母ヘカベに伝えたのは、「屋敷にしまっている衣装の中で、一番あでやかで大振りの、そして御自身も一番気に入っておられる衣装」(6. 271-2)を、アテネの膝に置くことであった。ヘカベが選んだその衣装とは、パリスがヘレネを伴って来た海路の途次、立ち寄ったシドンから連行してきた女たちが織り上げた衣装の中の最も見事な一着であった(6. 289-95)。この不吉の衣装をアテネが嘉納する筈もなかった。女祭司テアノがその衣装をアテネの膝に置き、ディオメデスの死を祈願したが、「パラス・アテネは聴き入れなかった」(6. 311)と、ヘクトル帰還の本来の目的が不首尾に終わったことがここに端的に語られる。第6歌でヘクトルと女たちの出会いが織り成す細やかな人間ドラマは、このすげない一行を背景に演じられるのである。

---

6) Cf. M. W. Edwards, *Homer Poet of the Iliad*, Baltimore and London, 1987, p. 207.



## (4)

女たちがこのようにアテネに祈願している一方で、ヘクトルはパリスの屋敷に向かう、とはすなわちヘレネの住まいを訪ねることに他ならなかった。ヘカベとの出会いは館の戸口で起ったが、ここでヘクトルはパリスとヘレネの邸に足を踏み入れる (6. 318)<sup>7)</sup>。そのヘクトルの出立ちは「手には十一腕尺もある槍を握っている。槍の先には青銅の穂が輝き、けら首には黄金のたがが繞らしてある」(6. 318-20) と描写される。彼がイリオスに帰ってきたのは、戦術上の任務遂行のための一時的なもので、一刻も早く戦場に復帰しなければならないとの意識の、これは現れである。彼は少なくとも外見は、いまだ戦場にいるがごとくに、甲冑に身を固め、「血に塗れ穢れた体で」(6. 268) パリスのいる奥部屋 (6. 321 〈タラムス〉)<sup>8)</sup>の敷居にまで達し、そこで弟が「絢爛たる武具——楯と胸当の手入れをし、曲れる弓に指をふれている」(6. 321-2) のを見出したのである。男の誇りたる十一腕尺もの槍を手を持つヘクトルと、その槍を戦場でなくし (3. 346-9 参照)、女部屋 (〈タラムス〉) で「曲れる弓」<sup>9)</sup>をもて遊んでいる<sup>10)</sup>かのごときパリス——このコントラストはほとんど男と女のそれに等しいといえよう。しかし〈タラムス〉の前で血塗られた武具姿で立つヘクトルの方がむしろ異常なのである。その威嚇的な姿はそのまま次のような語気鋭い言葉となってパリスに向けられる。

お前は何という男だ、このように胸の中に怨みを抱いてすねているの

- 
- 7) Graziosi and Haubold, *ibid.*, p. 41 は、“When Hector enters their bedroom, ...” と言っているが、6. 318でヘクトルが入ったのは、松平訳が解しているように、パリスとヘレネの邸であって、彼等の寝室 (〈タラムス〉) ではない。
- 8) 6. 321の〈タラムス〉は、松平訳では「妻の室」となっている。
- 9) 弓は『イリアス』でしばしば臆病者の使う武具とされている。11. 385-90 参照。
- 10) Cf. Graziosi and Haubold, *ibid.*, p. 168 (ad 321-2 n.).

は見苦しいぞ。兵士らは町のめぐり、高い城壁のめぐりで戦いながら死んでゆくではないか。この町をめぐって戦いの火が燃えさかっているのも、お前のためなのだぞ。お前とて、忌わしい戦いを恐れてひるむ男を見れば、腹が立つであらう。さあ起て、すぐにも町が猛火に焼け落ちるようなことにならぬ前にな。(6. 326-31)

しかしこの叱責の言葉はすでに、母ヘカベの前で発したあのパリスの存在そのものを否定するような呪いとは、違ってきている。これは厳しい難詰ではあるが、それ以上にパリスがその原因となったトロイア戦争の現実を冷静に見据えた批判であり、それを踏まえての激励の言葉となっている。この変化はパリスを直接目にしていない時と、彼に面と向かっている時の言葉の差異としても十分納得できようが、さらに言えば、ヘレネがそばにいることの効果と解してよいのではないか。ヘクトルがこのパリス批判を言う直前、詩人は「アルゴスのヘレネは侍女たちに囲まれて坐り、女たちに見事な手仕事の指図をしていた」(6. 323-4)と語る。ヘクトルは〈タラモス〉にいるパリスを見出した(6. 321)時、当然のことながら、そのそばにヘレネがいるのを目に留めていた。

パリスへの批判はヘレネにも向けられていると受けとられかねない。ヘクトルはそのことを十分に意識していたのではないか。ヘクトルは事実、第3歌における長老たちと同様<sup>11)</sup>、ヘレネを批判することは絶えてない。ヘレネも後にアキレウスに殺害されたヘクトルの遺骸に縋って嘆く時、次のように述懐している。

ヘクトル、あなたは数多い夫の兄弟方の中でも、とりわけわたしには大切なお人でした。[……] わたしはかつて一度もあなたの口から、

---

11) 3. 145-65参照。特にプリアモスは「わしの思うにはそなたに罪はない、責はアカイア勢との悲しい戦いを、わしの身に起された神々にある」(3. 164-5)と言う。

意地の悪い、蔑むような言葉を聞いたことはありませんでした。それどころか屋敷の中で、夫の御兄弟とか御姉妹たち、また美しく装った御兄弟の嫁御たちのどなたかが、それにまたお姑様が——お舅様はいつでも実の父親のように優しくして下さいましたが——わたしをお咎めになる時は、あなたはあなたらしい優しいお気持ちと、もの柔らかなお言葉で、その方をなだめて止めて下さいました。(24. 762-72)

このように、アカイア勢に恐れられていた戦士ヘクトルは、他方でヘレネに、そして弱き立場の女性たちに常に人間的な思いやりを見せる、男の中の男であった。

このヘレネ効果におおいに助けられたかのように、パリスはヘクトルの叱責の言葉を悪びれる様子もなく率直に受けとめ、次のように応答する。

ヘクトルよ、兄者がわたしを責めるのは尤もなことで、無理な言い分ではない。さればわたしからも存念を話すから、心して聴いてくれ。わたしが部屋でじっとしていたのは、なにもトロイエ人たちの仕打ちに腹を立てたり、不満であったからではない。わたしは無念の想いをじっくりと噛みしめたかったのだ。しかし今は、妻が優しい言葉で説いて、わたしを戦場に立たせようとしているし、わたしもまた、そうするのが良いと思っている。勝利は人から人へと移ってゆくものだからな。わたしが鎧をつけるまで暫く待っていてくれ。それとも先に行ってくれば後から行く。追いつけると思うから。(6. 333-41)

このように言うことで、パリスは見事に立ち直ったのである。パリスはヘクトルの批判を条理(〈アイサ〉)に反したことで、条理を超えたことでもない、その正当性を認めた上で、彼が〈タラモス〉に坐っていた理由を、「(メネラオスとの一騎討ちに敗れた) 無念の想いをじっくり噛みしめたかったのだ」(6. 336) と述べ、さらに〈タラモス〉(6. 336) にいて、今

立ち上がろうとする彼の決意までも、妻の影響下にあると率直に告白する(6. 337-9)。ヘレネがそのような「優しい言葉で」(6. 337)励ましたとは、テキストの上で明示されてはいない。後で取りあげるヘレネの言葉から推察する限り、彼女による説得はどちらかといえば疑わしい。ヘレネは「優しい言葉」どころか、いつもかなり辛辣な言葉でパリスに対しているように思われる。むしろ直前のヘクトルの言葉が直接のきっかけとなり、それを率直に受けとめたことが、パリスのこの決意となったのではなからうか。つまりパリスはこの時、瞬時にそう決意したと思われるのである。にもかかわらずそれをヘレネの説得によると言った。しかしパリスは虚言を弄しているととる必要はない。パリスの主観的な思いがそう言わせたのであろう。彼にとってヘレネの存在はかくも大きな意味を持っていたのである。

さらに私はこのパリスの主観におけるヘレネの影響を、テキストに即して、あえて次のように解したい。ヘレネの姿を眼前にした、つまりヘレネ効果の下に発せられたヘクトルの言葉、叱責でもあり激励でもあるあの言葉によって、パリスはこの瞬間立ち上る決意をしたのだと。パリスは事実はそのように言うべき事態を、ごく主観的にヘレネの説得によると受けとった、と解せよう。

ここでもう一つ注目したいのは、パリスが立ち直る理由としてつづけてあげた「勝利は人から人へと移ってゆくものだからな」(6. 339)という言葉である。同じ認識をパリスは第3歌でもヘレネに向かって述べている。メネラオスとの一騎討ちから逃げ帰ったパリスを非難したヘレネに、パリスは次の言葉を返す。

妻よ、どうかそのような激しい言葉で、わたしを根性なしと責めないでくれ。さっきのメネラオスは、アテネのお助けがあって勝ったのだ。今度はわたしが彼を負かす番だ、われわれにも神々がついて下さるのだからな。しかしまあ今は、床入りして愛の楽しみを味わおうではないか。(3. 438-41)

「勝利は人から人へと移ってゆくもの」とは端的に運命の認識である。この運命観が第3歌では、パリスに戦さを放棄してヘレネとの愛に身を任せるように促したが、この第6歌では男の本分を再び引き受ける決意を彼にもたらしした。このような運命観はパリスだけのものではない。『イリアス』全体を貫く人間洞察である。しかし同じ運命観と見えても、人それぞれに受け取り方は微妙に異なるし、ひいてはその人その人の人間性の差異をも浮き彫りにする。このパリスの運命観と、後に見るヘクトルのそれは同じであり、しかしまたやはりそれぞれパリスのものであり、ヘクトルのものであるとしか言いようのないニュアンスの相違を示す。

パリスはこの運命観を述べた後で、まさにその洞察に基づいてヘクトルに「わたしが鎧をつけるまで暫く待っていてくれ」(6. 340)と言う。このパリスの「待っていてくれ」の要請が、戦場に一刻も早く復帰しなければならない筈のヘクトルに、妻アンドロマケに会うための口実、そしてそのためのしばしの時間を与えたのである。パリスのあまりに率直な戦線復帰の決意表明に「ヘクトルは一言も口を利かなかった」(6. 342)。この沈黙は、ヘクトルのパリスへの呪いの言葉を聞いた後の母ヘカベのあの沈黙に対応している。しかしこの二つの沈黙が含意する内容は大きく変化していた。それは、〈タラモス〉で所在なげに弓をもて遊んでいたパリスから今にも立ち上ろうとするパリスへの変容であるとともに、いやそれ以上に、このパリスを凝視するヘクトルの心情の変化であった。パリスを呪うことでヘカベにあの沈黙を強いたヘクトルはもはやいない。このヘクトルの沈黙はパリスの想定外の応答に戸惑いと疑念を内包させつつも、彼をそのままに受容しようとする沈黙であった。

## (5)

このヘクトルの複雑な心情を察したかのように、ヘレネは彼に優しい言葉で語りかける。

わたしのような、誰もが顔をそむける、犬のように恥知らずのこんな悪女を、妹に持ったお気の毒な兄上、ほんとうにわたしは、母が産んでくれたその日に、恐ろしいつむじ風が、山かあるいは鳴りとよむ海の波の中へでもさらって行ってくれたら、どんなによかったかと思えます——海ならば、こんなことになる前に、波がわたしをどこかへ流してくれましたものを。(6.344-8)

『イリアス』におけるヘレネは、第3歌でトロイア戦争の原因を神々に帰してヘレネの罪を咎めないプリアモスの優しい語りかけに応えた彼女の言葉(3.171-80)にも明らかに見てとれるように、自分の過去の行為を責めつづけ、「涙にくれつつ悲しい日々を送っている」(3.176)女性である。同じ罪責を負う、いかにも軽薄なパリスのありようとはほとんど対照的な言動を見せ、それだけにトロイアの人々、とりわけ長老たちやヘクトルの同情さえ獲得している類い稀な存在である。この場面でもヘレネはヘクトルの優しさを感じとり、本来なら自分にも向けられるべき批判が、「世間の人々の怒りや悪口」(6.351)を物ともしないパリスの軽薄な振る舞いゆえに、もっぱら彼にだけ集中することに恐縮しているのであろう。彼女は何よりもヘクトルの沈黙の複雑な内実を感得できる女性である。だからこそヘレネはヘクトルの沈黙に感応して、まずは徹底した自己批判から始めたのである。それはいわゆる「過去の非現実的仮定の祈願」として表現される、わたしなどそもそも生まれてこなかったらよかったのに[……]と。これはまさにヘカベの前でヘクトルが口にしたあのパリスの存在否定の呪いに対応している。ヘクトルのパリス受容の沈黙に接して、そこに僅かに残されている疑念を掬いとり、いわばヘクトルのあのパリスの存在否定にまで立ち返えり、それを自分に当てはめた発言、妥協なき自己批判であった。

ではヘレネはなぜ自死しなかったのであろうか。それは彼女に自己の行為に対する厳しい倫理的批判とともに、それを運命として見る見方があっ

たからである。上記の引用（6. 344-8）につづけて、ヘレネは次のように言っている。「しかし今の不幸は神々がそのようにお定めになったのであれば致し方ありませんが [……]」<sup>12)</sup>（6. 349）。過去の罪過を神々、あるいは運命の所為にする運命観は、人間の主体性、倫理的行為を虚しいものとするように悪用されもするが、逆に『イリアス』においては凡その場面にそうであるが、人生のありようをかえて豊かにするようにも作用する。第3歌のプリアモスの発言においては、自分の振舞いを嘆きつづけるヘレネに対する慰めとして、彼女の存在の受容として機能した。ここではいわばあのプリアモスの慰めの言葉をヘレネ自らが自分に適用している。しかしこれは自分の罪過に胸を打つことが先行しているからこそ有効なのである。

この後、つまりこのように生きるのが神々の定めであったのならと述懐した後、ヘレネは次のような驚くべき発言をしている。

せめてはもっとましな——世間の人々の怒りや悪口を感じることで  
 きる人の妻であつたらと思います。今のあの人には、しっかりとした  
 気持ちなどありませんし、これからもありますまい。ですからいずれ  
 自分が、その報いを受けることになるに違いありません。（6. 350-3）

この大胆なパリス批判も、かの徹底した自己批判が先行しているからこそ、効力を発揮しているのであるが、これこそヘレネ自身が直接耳にしたわけではない、ヘクトルのあのパリスへの呪いの言葉と対応している。ヘレネはヘクトルのパリス受容のあの沈黙に隠されているパリスへの疑いを察して、それを拡大して明示してみせたのである。このようなパリスだからこそ、ヘクトルのあの沈黙によるパリス受容が、そして彼女自身が許容

---

12) 「致し方ありませんが」——この部分は原文にはなく、松平訳によって補なわれたもの。

されていることが、いかにヘクトルの大いなる寛容によるか、それがヘレネにはよく分かっていたのである。これはヘレネの運命観と、それに基づく深い人間洞察、さらには徹底した自己批判の上に築き上げられた自己肯定、つまりは豊かな人生経験の裏付けを持った心憎いまでの見事なレトリックといえよう。

つづいてヘレネは次のようにヘクトルに呼びかける。

でも兄上、どうかお入りになって、この椅子にお掛け下さい、恥知らずなわたしとアレクサンドロスの乱心のために、兄上は誰よりも心を痛めておいでに相違ありませんもの。ゼウスはわたしら二人が後の世まで歌いつがれるようにしてやろうと、こんな辛い運命を下されたのです。(6.354-8)

ここでヘレネはヘクトルに彼女の部屋に入るようにと勧めている。私たちは改めてヘクトルがパリスとヘレネの屋敷に入り、彼らの私的空間たる〈タラモス〉の敷居までやって来て、鎧をつけたままのその場にふさわしからぬ出で立ちで立ち止まり、中にいるパリス及びヘレネと語りあったことを確認させられる。ヘレネはこの時初めてヘクトルに彼女のいる〈タラモス〉に入るように求めたのである。それはパリスがしたように、女の世界で鎧を脱いで寛ぐことを含意していよう。それは、すぐにも戦場に復帰しなければならない——そのために彼は武具をつけたままでいる——ヘクトルにとって、きわめて危機的な誘いであった。ヘレネはもちろん意識してそのような誘惑を試みたわけではない。彼女はただ自分とパリスがヘクトルに許され、受容されていることへの感謝の念を示したかっただけであろう。しかし詩人はムーサ（ミューズ）のより広やかな、より客観的な視点から、それを男の世界と女の世界の出会いが孕む危機として暗示したと思われる。ヘクトルはこの第6歌において、そのような危機を通過することで豊かな変容を遂げてゆくのである。



ヘレネはヘクトルに「どうかお入りになって」と言った後で、「この椅子にお掛け下さい」(6. 354)と勧める。母ヘカベが「待っておいで」と言っただけなのに、ヘレネは大胆にもおそらく彼女が坐っているごく近くを指差して、「この椅子にお掛け下さい」とヘクトルを招いたのである。第3歌では、ヘレネが奥部屋に入ると、彼女のために女神アプロディテが自ら椅子<sup>13)</sup>を運び、パリスと向き合うように据えた(3. 423-6)とある。それが二人の床入りへと直結したのである<sup>14)</sup>。ここでヘレネがヘクトルに近くの椅子に坐るように勧めたのは、彼女の無意識の誘惑と解せよう。事実ヘレネはこの直前に、パリスより優れた人の妻でありたかった(6. 350)と、ヘクトルに語っていた。このより優れた人とは、ヘクトルを含意していることは前後の文脈からほとんど疑いえない。ヘレネがそう言った時、ほぼ意識的であったと見てよかろう。ただ非現実的過去への願望という装いに包むことで、そのように大胆に語ることができたのである。

さらに想像を逞しくすれば、「この椅子にお掛け下さい」は、かつてヘレネがスパルタのメネラオスの館で、客人パリスに勧めた同じ言葉であったかも知れない。パリスはその誘いに応じたが、ヘクトルは後に見るようにそれを断ったのが決定的な違いであった。ヘレネはしかしここではあくまでもヘクトルへの感謝の気持ちから、その意味で親しみを込めてこの勧めをしたのである。その理由として、「恥知らずなわたしとアレクサンドロスの乱心のために」(6. 356)ヘクトルが人一倍心を痛めていることをあげている。「乱心」とはギリシア語で〈アーテー〉であるが、これは〈アーテー〉の女神とも解しえなくはない。しかしここではトロイア戦争の原因となった二人の過誤ないし迷妄の意であろう。ヘレネはここでも自分の責任を自覚しているのである。

つづいてヘレネは再びゼウスがもたらした運命に言及する。すでに触れ

13) 6. 354の「椅子」と同じギリシア語が用いられている。

14) Cf. Graziosi and Haubold, *ibid.*, p. 179 (ad 354 n.).

たように、ヘレネは自己のこれまでの歩みを二つの視点から捉えている。そのことが自分の人生を単に悲嘆の対象として捉えるだけではなく、同時にやむをえなかった経験として受容し、さらには肯定的にさえ見る可能性を拓いた。運命はギリシアにおいて人間を人間たらしめる存在根拠であり、認識根拠ともなった。ヘレネは次のように述懐する。

ゼウスはわたしら二人が後の世まで歌いつがれるようにしてやろうと、こんな辛い運命を下されたのです。(6. 357-8)

この松平訳を二行の行わけをも含めてより原文に近く修正すれば、次のようになる。

わたしらにゼウスは辛い運命を下されたのです、後の世に  
ある人々にわたしが歌いつがれるようにと。

松平訳には「わたしら二人」とあるが、「二人」とは原文には明示されていないので、「わたしら」とした。修正訳では、「わたしらに」(6. 357)、「わたしが」(6. 358)と繰り返されているが、原文では「わたしらに」は関係代名詞の複数与格が用いられており、「わたしが」の方は動詞の複数一人称で示されている。いずれも二人を明示する双数形は使われておらず、複数形になっている。しかし関係代名詞で言われている「わたしらに」の方は一行前の「恥知らずなわたしとアレクサンドロス」を受けているので、これを「わたしら二人に」と解するのは当然である。ゼウスがトロイア戦争の原因となる「辛い運命」を下したのは、ヘレネとアレクサンドロス（パリス）の二人に対してであった。しかし後者の「わたしが」の方がなお「わたしら二人」を指しているのかは必ずしも自明ではない。この場合ヘレネはヘクトルに向かって語っているので、ヘクトルをも含め

た「わたしら（三人）が」と解する可能性は残されている<sup>15)</sup>。この場面におけるヘレネとヘクトルの微妙な関係を考えれば、この解釈の方がむしろふさわしいのではなからうか。いずれにせよ、ヘレネはここでトロイア戦争の原因ともなった自分とパリスのこれまでの歩みを、ゼウスが下した運命と受けとめ、それはこの二人であれ、ヘクトルを含む三人であれ、「わたしら」が後世に歌いつがれるためであったと言っているのである。まるで『イリアス』そのものが現在にまで読みつがれていることをヘレネがはるかに見通しているかのようである。

ここで留意したいのは、ヘクトルがヘレネの部屋の敷居近くに立った時、「アルゴスのヘレネは侍女たちに囲まれて坐り、女たちに見事な手仕事の指図をしていた」(6. 323-4)とあったことである。ヘレネが女たちとともに携わっていた手仕事とは、機織りであり、その布の図柄はヘレネゆえに男たちが戦うトロイア戦争そのものであったことが、第3歌の次の描写から解る。

折しもヘレネはその居間で、赤紫色に染めた二幅もある大きな服地を織っているところ、馬を馴らすトロイエ人と、青銅の武具を鎧うアカイア勢とが、ヘレネゆえに軍神の<sup>たなごころ</sup>「掌」に躍らされて嘗めた苦難の数々を、布地に織り込んでいた。(3. 125-8)

つまりヘレネはあたかも自分が詩人ホメロスと同じパースペクティヴをもって、自分が当事者であるトロイア戦争そのものを布に織り上げていたというのである。第6歌357-8行で「わたしら」が後世に歌いつがれるようになるというのもこれと同じで、ヘレネは自分たちの運命を距離をもって、ホメロスと同じムーサ（ミューズ）の視点で見ていると言えるのではないか。もしそうなら、このヘレネの言葉はもはや単なる当事者のなまの

15) Cf. Graziosi and Haubold, *ibid.*, p. 180 (ad 358 n.).

嘆きではなくなる。ヘレネはここで自分たちの生が歌に歌われることで、人間の悲惨の一つの典型として将来の人々に受けとられると見ている。そしてそのことによって、同じような悲運に襲われる数多くの人々を照らす鏡となり、そういう人たちに深い慰めを与える存在と化すだろうと、暗示しているのではないか。私はこのヘレネの言葉には、パリスの「勝利は人から人へと移ってゆくものだからな」(6. 339) という運命観とも共通するものを窺わせつつ、自己の運命のより透徹した認識に達した者の、決して浅薄ではない、ある充足感が見られると思う。これが可能となったのは、ヘレネの生涯が彼女の〈アーテー〉(過誤)の結果であるとする見方の他に、神々の下す運命でもあったとの理解が、彼女自身にも周囲の者たちにも、そして詩人ホメロスにもあったからであろう<sup>16)</sup>。

このヘレネの言葉——彼女の〈タラモス〉に入って自分のそばに坐って欲しいとの願い——に、ヘクトルは次のように応える。

ヘレネよ、せっかくだがわたしに座をすすめるのは無用にしてくれ。すすめられてもそうするわけにはゆかぬ。わたしは今、トロイエ勢を守らねばならぬと気が<sup>せ</sup>急いているのだ。彼等はわたしが<sup>せ</sup>おらぬのを、さぞ心細く思っているであろう。そなたは彼を<sup>せ</sup>急き立て、当人にもわたしが町にいる間に追いつけるよう急がせてくれ。わたしはこれから家へ帰り屋敷の者ども、それに妻と幼い倅に会いにゆくところなのだ。もう一度会いに帰って来てやれるかどうか判らぬし、ひょっとしたら神々は、わたしをアカイア人の手によって亡き者になさるかも知れぬのでな。(6. 360-8)

第一行目の松平訳で「せっかくだが」となっている語は、直訳すれば

16) 川島重成、『「イーリアス」ギリシア英雄叙事詩の世界』、岩波書店、1991年(岩波人文書セレクション、2014年)、120-2頁参照。

「(そなたがそう) 求めるとしても」となろう。これは「愛する」という動詞(φιλέω)の分詞女性単数形であり、ヘクトルは「そなたは(私に)そうしてもらいたいのだろうか、私に坐らせることはしないでくれ」と言っているのであり、松平訳の「せっかくだが」はたいへんこなれた訳と言ってよい。しかしこれは「そなたの(私への)愛にもかかわらず」とも読める。すなわち詩人の語りのレベルでは、すでに論及した「(彼女のそばの) 椅子に坐る」の性的含意をもあわせ考えれば、これはヘレネのヘクトルに対する微妙な気持ちを浮彫りにしている、と解せよう。ヘクトルはヘレネの真情をどこまで意識していたかはともかくも、客観的に見ればヘクトルはヘレネの求愛を断わり、そのことでパリスのようにヘレネの魅力に取り込まれてしまう男としての存在の危機を辛うじて突破したのである。彼にそうさせたのは「トロイア勢を守らねばならぬ」(6. 361-2)、そのために一刻も早く戦線に復帰しなければとのトロイア勢一の勇士としての自覚と、自分の妻と子に会いたいとの、公人ヘクトルの内部に隠されていた真情であった。この最後の全く私的な欲求を彼が自分に許容しえたのは、パリスのあの「待っていてくれ」(6. 340)の一言であった。それゆえヘクトルはヘレネに「そなたは彼を<sup>せ</sup>急き立て、当人にもわたしが町に間に追いつけるよう急がせてくれ」(6. 363-4)と言い、その時間を利用して自分は妻と幼い息子に会っておきたい、これが最後となるやも知れぬので、と告げることができた。このようにしてヘクトルは思いがけなくも、彼に期待されているパブリックな空間たる男の世界とは異質の、プライベートな空間、女の世界の最も細やかな消息にしばしの間身を潜すことになったのである。

## (6)

次に第6歌全体の伝統的なタイトルともなった「ヘクトルとアンドロマケの語らい」の場を見ることにしよう。二人の出会いの場はトロイア城の

名高いスカイア門であった。ヘクトルはヘレネと別れてわが家にやってくるが、そこに妻アンドロマケの姿はなかった。女中頭によれば、アカイア方の勢いが凄まじく、トロイア勢が苦戦していると聞いて城の大きな櫓に出掛けた（6. 386-7）。アンドロマケについては、ヘクトルの妻として〈タラモス〉に蟄居してひたすら女の役割を果たす典型的な貴婦人のイメージを描きがちだが、私たちが紹介されるアンドロマケは、最初から女の領分を超え、戦況を気にして櫓に向かうなど、男の世界にも関わろうとする一面を持つ女性であった。ヘクトルは〈タラモス〉で妻に会うことは断念し、戦場に復帰しようとして<sup>17)</sup>スカイア門に達した時、櫓から帰ってきた妻と出会ったのである。スカイア門はまさに城壁外の戦場たる男の世界と、少なくとも今は女たちにその管轄が託されている城壁内の世界の境界線上にあり<sup>18)</sup>、このヘクトルとこのアンドロマケ、それぞれ男女の境界を逆の方向から突き破ろうとする自由な男と女が出会うべくして出会う場所であった。ヘレネとは、パリスの屋敷の〈タラモス〉の敷居まで来て、そこから中にいる彼女と語り、中に招き入れようとする彼女の誘いを辛うじて断った。それならこの物語のクライマックスであるアンドロマケとの出

---

17) 松平訳6. 392-3は「いずれ彼が戦場に向かう通路となるスカイア門に着くと」になっているが、6. 393の動詞「(戦場に) 向かう」が単なる未来ではなく、*ἔμελλε διεξιμεναι* となっているので、私は「彼が戦場に向かうとして、その通路であるスカイア門に着くと」と訳したい。呉茂一訳（平凡社版、2003年）は、「[……] スカイア門のところへゆき着いたとき——そこを潜って、いま平原へ出てゆこうとする、」となっている。M. M. Willcock, *The Iliad of Homer Books I-XII*, edited with Introduction and Commentary, London, 1978, p. 248 (ad VI 393 n.) も次のように言う。“He was not then going up to the wall or tower to find Andromache, but proceeding straight out on to the plain, when, she, having left her position on the tower, came running to meet him.” 他方G. S. Kirk, *The Iliad: A Commentary, Volume II: books 5-8*, Cambridge, 1990, p. 210 (ad 6. 393 n.) はWillcockを批判して次のように記している。“*ἔμελλε* surely does not imply that he was about to return to the field of battle at this moment, and would have done so had not his wife intercepted him...”

18) Cf. M. Arthur Katz, “The Divided World of *Iliad* VI”, H. Forley, ed. *Reflections of Women in Antiquity*, New York, 1981, pp. 19-20, p. 31; Graziosi and Haubold, *ibid.*, pp. 44-5.

会いは、今度こそ〈タラモス〉の中で起ると期待しても無理はなかろう。しかし実際はそうならなかった。あくまでも仮定の話だが、もし二人の語らいが〈タラモス〉で行なわれていたら、どうだったろうか。ヘクトルがかのパリスのようにとは言わないまでも、かなりの程度その虜になっていた可能性も皆無とは言えないのではないか。

私たちはヘクトルが十一腕尺の長槍を手に持ち、鎧を着けたままの姿でいることを忘れてはならない。彼はその出立ちで今にも戦場にとって返そうとしていたのである。アンドロマケはその夫の手を握って涙ながらに次のように語りかける。

あなたはひどい方、その勇気があなたの命取りになるかも知れぬというのに、幼い坊やのことも、やがてあなたに先立たれて独り身になる不運なわたしのことも憐れんで下さらぬ。[……] 万一あなたを失うことになったら、墓の下に入る方がずっとましだとわたしは思っています。(6. 407-11)

どうか哀れと思って、このままこの櫓に残り、子を孤児<sup>みなしご</sup>に、妻をやもめ<sup>やもめ</sup>の身になさらないで下さい。(6. 431-2)

アンドロマケのこの説得力ある語りは、〈タラモス〉の中でこそ発せられるべき、彼女の内奥からの叫びであった。その中でも特に注目したいのは、彼女の究極の訴え、「万一あなたを失うことになったら、墓の下に入る<sup>19)</sup>方がずっとましだとわたしは思っています」(6. 410-1)である。この

19) 「墓の下に入る」(6. 411) について講演後の質疑応答の場で、石川榮治氏より、このフレーズを口にするアンドロマケは「狂ったように」(6. 389 *μαινομένη ἔκκυια*) 城壁に向った女であり、「墓の下に入る」(直訳すれば「地(の下)に入る」*χθόνα δύνειν*) は6. 135-6の「(ディオニュソスは海に逃れて) 波の下にもぐり [……]」(*δύσεθ' ἄλός κατὰ κύμα*) と関連づけて読めるのではないか、との興味深い指摘があった。

ような死の願望は本来なら死者の埋葬の場で女性が発する弔いの言葉としてこそふさわしいものであろう<sup>20)</sup>。アンドロマケはヘクトルがすでに戦死したかのように嘆いているのである。しかしこのひたすら悲嘆に身を任せ、「あなたはひどい方、その勇気があなたの命取りになるかも知れぬというのに [……]」(6. 407) と、戦いに行かないで欲しいと言わんばかりに夫に縋りつく、まさに女性性の代弁者といってよいアンドロマケは、他方できわめて冷静に、客観的に自分を見つめ、周囲の状況を分析できる人でもあった。

まず彼女はヘクトルが戦死したら、「わたしには父も気高い母もありません」(6. 413) と述べて、故郷テベで父エエティオンと七人の兄弟がアキレウスに殺され、母はアキレウスの囚われの身となり、莫大な身の代と引き換えに解放されたものの、彼女(母)の父のもとでアルテミスの矢に撃たれて世を去ったことを伝える(6. 414-8)。だからアンドロマケにはヘクトル以外に頼るべき者は誰もいない、それゆえ「どうか哀れと思って、[……] 寡婦の身になさらないで下さい」(6. 431-2) とつづけたのである。この14行にも及ぶアンドロマケの語りは、聴衆(読者)に彼女の過去についての初めての情報をもたらし、同時に「アキレウスは父エエティオンを殺しはしたものの [……] 亡骸はきらびやかな物の具とともに焼き、墓も築いてくれました」と語ること、アキレウスという『イリアス』の主人公——やがてヘクトルを殺すことになる仇敵——の本来はやさしい一面をも垣間見させる。このようにして、聴衆(読者)はアンドロマケが単に現在の悲嘆に身を任せるだけでなく、自分の過去の出来事を整理し、敵の長所まで客観的に捉え、パースペクティブをもって現在を位置づけて語ることでできる女性であるとの印象を与えられる。アンドロマケの中に隠されたいわば男性的なるものの現れといえよう。

この点はずづいてアンドロマケが思いがけなくも実践的戦術に言及する

---

20) Cf. Graziosi and Haubold, *ibid.*, p. 195 (ad 410-11 n.).



ことによっても確かめられる。彼女は突如次のように語り出す。

それから手勢を野無花果の傍らへお置きなさいませ、あそこは一番城に登りやすく、城壁も攻めやすいところですから。(6. 432-4)

これは典型的な〈タラモス〉の女性と見なされがちなアンドロマケには似つかわしくない発言として、従来聴衆（読者）の躓きの石であり、多くの評家をも悩ませてきた。しかしアンドロマケは決して〈タラモス〉に籠っているだけの女性ではない。すでに見たように、戦況が心配で櫓にまで出掛けていくような女性である。そうはいってもアンドロマケがここで指示している戦術は、やはり女性の視点からのそれである。彼女は城壁の脆弱なところに兵を配置し、ヘクトルは櫓に残り（6. 431）、そこから防衛戦を指揮するように勧めているのである。アンドロマケはこの語りの冒頭ですでにヘクトルの勇気が命取りになるとの懸念を表明していた。『イリアス』のその後の展開が示すように、アンドロマケのこの予感 は的中する。第22歌でプリアモスやヘカベは口々にヘクトルに城壁の中に入って籠城戦を戦うように哀訴するが、彼はその勧告に従わず、一騎討ちでアキレウスに倒され、それが事実上のトロイア陥落となったのである。一日も長く生きるためには、女の知恵による戦術の方がしばしば男性のそれに勝る。しかしこのような防衛戦は、男性の恥と名誉の倫理に抵触するものであった。このアンドロマケのトロイアの苦境をより冷静に見据えた戦術の提示を受けて、ヘクトルはトロイア勢、アカイア勢を問わず、『イリアス』のすべての英雄たちの言動を規定している名誉観、恥（アイドース）の念に基づいて、次のように応える。

妻よ、今そなたがいったことは、みなわたしも考えている。しかしな、もしわたしが臆病者よろしく、戦場から離れて尻込みするようなことになったら、トロイエの男たちにも、裳裾曳く女たちにも顔向け

ができぬと、心から思っているのだ。第一とてもそのようなことをする気にはなれぬ、わたしは父上の輝かしい名誉のため、またわたし自身の名誉のためにも、常にトロイエ勢の先陣にあつて勇敢に戦えと教えられて来た。(6. 441-6)

ヘクトルはここでまずアンドロマケの提言は彼もまた考えてはいると言う。それがトロイアの人々の命を一日も長く守るのに、よりよい戦術だと彼も認識している、と解釈してよいのではないか。それにもかかわらず、恥〈アイドース〉の念がそれを許さない。彼は常に第一線で戦えと教えられてきたという。ここに典型的な男と女の生き方の違いが明らかに表われている。ヘクトルの言動を支配しているこの名誉と恥の念の背後には、トロイアの陥落する日がいつかは来るという予感があつた。ヘクトルはつづいて「それというのも、わたしは心の内でよくよく承知しているのだ——いずれは聖なるイリオスも、ブリアモスも、またとねりこの名槍を揮うブリアモスの民も亡びる日が来るということもな」(6. 447-9)と言っている。だからこそ彼は身を挺して先陣に立ち、雄々しく戦おうとしてきたのである。

このトロイア陥落の予感、突きつめて言えば、人間は皆死すべき者である、人間の生は悲惨を免れることはできない、という生の感覚は、男性のみならず、女性も等しく持っていた。しかしそれに対処する仕方が、男と女では、ヘクトルとアンドロマケでは違っていた。アンドロマケの願いを容れて城に留まり、そこから防衛戦を戦う方が、確かに苦境にある者にはより賢明な選択であろう。だがこのような思いを口にすることは女性には許されても、恥と名誉の理念に縛られた男性にはできなかったのである。しかしスカイア門でアンドロマケと相対しているヘクトルは、まさに彼女の言動、いや存在そのものが発する女性固有の内的力に感応したのか、あるいはイリオスに帰ってきて以来の、ヘカベ、パリス、ヘレネとの折衝に次第に影響されたということもあつてか、彼の男性性を規定する硬直した

恥と名誉の念を相対化する視点をもすでに獲得し始めていたのである。ヘクトルはつづいて次のように語り出す。

しかしわたしが気懸りなのは、その後のトロイエ人たちの悲嘆、また母ヘカベ、父プリアモス王、やがて敵の手にかかり砂塵の中に果てるであろう多くの勇敢な兄弟たちの悲しみもさることながら、青銅の武器を鎧うアカイア勢の何者かが、そなたから自由の日を奪い、泣きながら曳かれてゆく時のそなたの悲しみこそが何よりも気に懸かってならぬ。(6. 450-5)

ヘクトルはここでもはや単に恥の念に立って男ぶりを前面に押し出すだけの男ではない。彼はアンドロマケの嘆きと悲しみに限りなく寄りそおうとする。彼はトロイア陥落の日を想像し、血の繋りのある父、母、兄弟たちの悲しみよりも、妻アンドロマケの悲惨がいちばん気懸りである、と言う。『イリアス』成立以来、2700年以上も経った現在の日本で、同じような言葉を心から妻にかけることのできる男性がはたしてどれほどいるだろうか。と思うにつけ、ギリシア人とトロイア人、男と女、血縁者と他人等の隔たり、境界線を軽々と超えるホメロスの自由に改めて感嘆の念を禁じえない。

ヘクトルはさらに、アンドロマケが召し使いとして機を織らされ、水を運ばされる姿を想像する (6. 456-8)。彼は女奴隷がしばしば主人の夜伽をさせられることを知っていたが、そのことはあえて口にしない。そして「あれを見よ、イリオス城をめぐる戦いで馬を馴らすトロイエ勢の中でも武勇抜群であったヘクトルの妻だぞ」(6. 460-1)と囁きたてるのを聞いて、アンドロマケは「隷従の日を防いでくれる」(6. 463) 夫を失った悲しみを一段と募らせるだろうとまで想像を逞しゅうして、最後に次のように結ぶ。

わたしはそなたが敵に曳かれながら泣き叫ぶ声を聞くより前に、死んで盛り土の下に埋められたいものだが。(6. 464-5)

この二行は明らかに、すでに言及したアンドロマケのあの死の希求「万一あなたを失うことになったら、墓の下に入るほうがずっとましだとわたしは思っています」(6. 410-1)を受け、それを引き継いだものである。アンドロマケの言葉は死者の弔いに際しての典型的な女性の嘆きだと指摘したが、ヘクトルはここでアンドロマケに限りなく近く寄りそい、ついに女性の言葉を用いて、彼女の心の琴線に触れたのである。

アンドロマケはこの言葉を聞いて何も応えない。しかしこれは、すでに見たヘカベの沈黙、ヘクトルの沈黙とはまったく違う沈黙であった。アンドロマケは確かに、夫に戦いを避けて彼女のもとに留って欲しいと願ったが、トロイア随一の勇士の妻として、それが無理なことは百も承知であった。にもかかわらずその願いを口にしたのは、ただ、彼女も予感している運命の日が近いという不安を、夫ヘクトルと分か合いたいと思ったからであろう。そしてまさに期待どおりの、いやそれ以上に彼女の真情にこまやかに共鳴する衷心からの思いやりを彼から示されたのである。彼女はそれに満ちあふれる思いを込めた沈黙で応じる他はなかったのである。

ここでヘクトルは乳母に抱かれたわが子に手を差しのべる。幼な子は父の鎧姿に脅えて泣き出し、乳母のふところに顔を埋める。その姿に父も母も笑い崩れる。トロイアの崩壊の日は近い、そういう予感の中で、彼らは頑是ない子供の仕草を見て、なお笑うことができるのである。なんとほのぼのとした情景ではないか。そこでヘクトルはイリオスに帰って初めて兜を脱ぐ。これは彼があたかも〈タラモス〉で、アンドロマケと幼な子アステュアナクスとの私的空間ですっかり寛ぎ、トロイア随一の英雄に課せられた公的義務から解放され、一私人に戻ったかのような振舞いであった。しかし実際は戦場と境を接するスカイア門の傍らで、パリスを待つ僅かの間だけ許された癒しの時間にすぎなかった。この非現実性は、ヘクトルが

幼な子を抱き上げて神々に捧げる次の祈りにおいて、露わに示される。

ゼウスならびに他の神々よ、どうかこの倅もわたしのよう、トロイエ人の間に頭角をあらわし、力においてわたしと同様に強く、武威によってイリオスを治めることができますように。またいつの日が、戦場から帰って来た彼を見て、なにがしかが「あのお方は父君よりも遙かに優れたお人じゃ」といってくれますように。また敵を討ち取って奪った血塗れの物の具を持ち帰り、母を嬉しがらせますように。(6. 476-81)

ヘクトルはこの直前に、妻に向かいイリオスの滅亡の日が来るとの諦念を述べ、アンドロマケの身に襲いかかる屈辱の日々を想像し、彼女の悲嘆とほとんど同化するまで彼の真情を吐露した——それこそが彼らの生のリアリティであった。そこでこそ二人は互いに最も近く接し、人間であることの深く、確かな真実とともに逢着していたのである。しかしこの祈りにおいては、彼の運命の認識とは矛盾する、トロイア存続への幻の希望を口にする。彼亡き後も、彼の息子がトロイアの将来を担ってくれるかも知れない。息子の勝利がアンドロマケの喜びとなりますようにと。果たしてアンドロマケはそのような幻の勝利に期待を寄せていたであろうか。むしろ武人の妻であったにもかかわらず、不可能と承知しつつヘクトルが戦線に復帰せず、彼女を寡婦に、幼な子を孤児にしないで欲しいと願ったあの言葉こそが、アンドロマケの女性としての真実の声だったのではないか——つまりどんな状況であれ、戦争に喜びを見出すことなど絶えてなかった<sup>21)</sup>、と言えるのではなからうか。とすれば、ヘクトルのこの祈りは虚空を打つものでしかなかった。もとよりこの祈りが決して叶えられないことは、言うまでもなく、詩人、そして聴衆の夙に知るところであった。

---

21) Cf. Graziosi and Haubold, *ibid.*, p. 47.

にもかかわらず、ヘクトルはこのように祈らざるをえなかった。彼はその双肩にトロイアの命運、彼の背後にいる父母、妻子、老人や女性たちの世界を担わされていたからである。このような人々の期待を背負わされたヘクトルが、迫り来る敗北の暗影の中に一条の希望の光を見ようとしたのも無理からぬ道理であった。ここにヘクトルの人間性の魅力があるとともに、その限界、弱さもまた現れていることは否定できない。しかしながらこういう人間の弱さをも詩人はたいへん好意的な目で見ていると感じざるをえない。いやギリシアの叙事詩である『イリアス』において、全体として、勝者に定められているギリシア勢よりも、敗者に運命づけられているトロイアの人々に、詩人の共感の眼差しがより豊かに注がれているという印象を受けるのである。

ヘクトルは神々に祈り終えると、子供を妻の手に返す。彼は涙を浮かべながら微笑む妻の姿を哀れと感じて、やさしく言葉をかける。

どうしたというのだ、あまり思い悩むのはやめてくれ。わたしの寿命が尽きぬ限り、わたしを冥府に落すことは誰にもできぬのだ。人間というものは、一たび生まれて来たからには、身分の上下を問わず、定まった運命を逃れることはできぬ。(6. 486-9)

ここにヘクトルの、ひいてはホメロスの運命観が端的に表現されている。寿命が尽きぬ限り、彼を冥府に落すことは誰にもできぬ、つまり人の世は運命以上でも、以下でもない。だからそれ以上に思い悩むことはないとヘクトルは言うのである。その定まった運命を逃れることができぬのは、卑怯者も武勇の者も<sup>22)</sup>、人として一たび生まれて来たからには皆同じだ、と

22) 6. 489aを松平訳は「身分の上下を問わず」とするが、私は「卑怯者も武勇の者も」と訳したい。原文ではκακόνとἔσθλόνである。これは確かに身分の上下とも解しうるが、『イリアス』では身分の上下は全くといってよいほど問題になっていない。そして松平訳もこの同じ文脈で、例えば6. 443のκακόςを「臆病者」と、6. 444のἔσθλόςを「勇敢に」と解している。

ある。正義という尺度ですべてを測りたいという、広い意味での合理主義の立場から見ると、非常に不公平と感じられることをヘクトルは平然と言っているのけるのである。武勇の者が、あるいは有徳の士が栄え、卑怯者が、悪しき者が減びるということを私たちは期待する。しかしヘクトルはそういう道德主義的世界観からはおよそ自由である<sup>23)</sup>。臆病者も勇者も同じように運命を逃れえない。人間は皆死すべき者である。このような運命観を持つとは、ある超越的な視点に立つということであって、そうして初めて人間は、自分こそが正しいとして他者を審く偏狭な尺度から自由になれるのではないか。ホメロス、ギリシアの詩人でありながら、敵、味方の区別を超えてギリシア人のみならず、トロイア人に対しても、実に曇りのない、偏見のない眼を持っている。それはホメロスも、ヘクトルがここで表明している同じ運命観に立って、人間を見ているからであろう。

それでは、このような冷徹な運命の認識を持つにいたった人間は、どのように生きればよいのか。ここでヘクトルはアンドロマケに次のように言う。

さあ、そなたは家に帰り、機を織るなり糸を紡ぐなり、自分の仕事に精を出し、女中たちには各自仕事にかかるように言い付けるのだ。戦さは男の仕事、このイリオスに生を享けた男たち皆に、とりわけてわたしにそれは任せておけばよい。(6. 490-3)

「機を織る」とは当時の女性の典型的な手仕事であった。運命を前に人にできることは、あるいはなすべきは、「機を織る」こと、つまり日常生活をきちんと営むしかないということであろう。そういう形で納得してゆくしかないのである。言うまでもなく「機を織る」ことに対応させて戦さこ

23) 正義が正面から問題になるのは、『オデュッセイア』、とりわけヘシオドスの叙事詩『神々の誕生』（『神統記』）と『仕事と日』以降である。

そが男の役目であると、ヘクトルは改めて男としての覚悟を語ったのである。

本論考において、ヘクトルはこの「戦さは男の仕事」という立て前に立ちつつ、この第6歌で思いがけなくも女たちの世界と関わり、折衝を重ねてゆくうちに、ほとんどこの常識を突き抜け、女性たち、とくにアンドロマケの真情をほとんど自分のものにするとところにまで至る、そのプロセスを跡づけてきたのである。しかし今や再び戦場に立ち戻ろうとするこの時、やはりこの「戦さは男の仕事」という理念を掲げて、ほんのしばしの間取り外していた男の象徴たる兜を再び身に着けざるをえなかったのである。一方アンドロマケは「大粒の涙をこぼしつつ、幾度も後ろを振り返りながら、家路についた」(6. 495-6)とある。このアンドロマケの姿は、ヘクトルを引き留めたい女性の真情と、彼に諭され、従わざるをえない女性の役割の相克を象徴的に示している。彼女は決して二心なくヘクトルに従ったわけではない。それを証しするごとく、彼女が屋敷に着いてまずしたことは、「機を織る」ことではなかった。そうではなく、多数の侍女たちと一緒にヘクトルを悼む悔やみの声をあげたのである。「このように女たちは、まだ世に在るヘクトルをその屋敷の内で悼んだが、それも自分たちの主人が、アカイア勢の猛威を逃れて、無事に戦場から帰ってくるとは信じられぬからであった」(6. 500-2)。アンドロマケはヘクトルのように、戦いの帰趨に期待を寄せることはもはやなかった。彼女の中の真の「女性的なるもの」は、運命の真実により近く位置していた、といえようか。

## (7)

一方パリスは「青銅造りの絢爛たる武具を身につけると」(6. 504)、高らかに笑いつつ町を駆けてくる。そのさまが厩<sup>うまや</sup>に繋がれた馬が綱を切って意気揚々と駆けてゆくという印象深い比喻(6. 506-11参照)によって表象される。〈タラモス〉での弛緩したありさまから立ち直ったとはいえ、



生来だらしなない軽薄なパリスが颯爽と疾駆する駿馬に譬えられる——このギャップにホメロスに固有のユーモアが感じられよう。ホメロスの世界に全否定される人間はいない。人間は死すべき者という運命の認識のもとで、愚かなパリスもそれなりの役割を付与されて明るく肯定されている——これがホメロスのユーモアであろう。

パリスは「たちまちにしてその兄、豪勇ヘクトルが、妻と懇ろに語り合った場所から引き返すところに行き合った」(6. 514-6) とある。妻と「懇ろに語り合った」という動詞 (ὁάριζε) は、別のところで、「(若い男女が) いちゃいちゃと長話をする」(22. 127)、「睦言を交わす」(22. 128) と訳されているのと同じ動詞である。第22歌の場合、ヘクトルが一騎討ちを避け、アキレウスと言葉で交渉する余地はないかと考え、それが不可能と悟る場面の彼のモノログの中に出てくる動詞である。第6歌におけるこの「懇ろに語り合った」は、ヘクトルとアンドロマケの人間性の真実を穿つ語りも、男の論理からすれば、「いちゃいちゃと長話をする」というような評価を下されかねないことを示唆していよう。それほどまでに、つまりむしろあのパリスにこそふさわしいと思われるほどに、ヘクトルは女性的なるものの領域に——男にとって危機的なところに——足を踏み入れたのである。

もうひとつ上記の松平訳に小さな修正を施すとすれば、「(ヘクトルが) 引き返すところに」(6. 515-6) を「引き返そうとするところ」にする方が原文により近い<sup>24)</sup>。すなわちパリスがヘクトルの方に駆けつけたこの瞬間、ヘクトルは妻との語りの場から引き返そうとしていたが、まだそうはしていなかったのである。ということは、「幾度も後ろを振り返りながら、家路についた」(6. 495-6) アンドロマケの姿を、ヘクトルもまた割り切れぬ思いで追っていた、ということになろう。「戦さは男の仕事」と言

24) 原文は εὐτ' ἄρ' ἔμελλε στρέψεσθ' である。呉茂一訳（平凡社版、2003年）は、「[……] その場所から、引き返そうとするところへ」となっている。

い切ったヘクトルといえど、いまだ複雑な心情を、つまりあの弱さを抱えていたことを、これは示唆していよう。パリスがヘクトルに「行き合った」(6.515)とは、彼が妻との語らいの場所から「引き返すところ」を追いついて、背後から声を掛けたというのではなく、アンドロマケが去っていった方向を、すなわちパリスがやってくる方向を、この瞬間までまだ見ていたヘクトルに、正面から語りかけたということになる。

このパリスがいかにも彼らしく、悪びれもせず、ヘクトルに正面から「兄上よ、ぐずぐずしていたために急いでいるそなたを引き留めてしまった、いわれた時刻に遅れたのではなかったかな」(6.518-9)と語りかけたのに対して、ヘクトルは次のように応える。

なにをいうか、物の判る男ならば、戦場におけるお前の働きをとやかくいうことはあるまい。もともとお前は強い男なのだからな。お前は自分で勝手にだらだらして、やる気を起さぬのだ。だからわたしは、トロイエ人たちがお前の悪口をいうのを聞くたびに辛くてならぬ。彼等はお前のせいで大変な苦勞をしているのだからな。

ではさあ、でかけようか。そうしたことは、いずれ互いに納得のゆくように話がつけられるであろう。幸いにわれらが脛当て良きアカイア勢をトロイエから撃退し、屋敷の中で自由を祝う混酒器を、永遠にいます天上の神々のために据えることを、ゼウスが許されるならば。(6.521-9)

このヘクトルの言葉は、だめ男パリスに対してきわめて理解あるものとなっている。かのヘレネの部屋で見せた、戸惑いと疑念を内包させた沈黙の延長線上にありながら、これはパリスに対してさらに肯定的になっている。いずれにせよ、あのヘカベの前で叫んだパリスの存在そのものの呪いからすれば、著しい相違を見せている。私はこの変化をもたらしたもののこそ、ヘクトルの女性的なるものとの出会いであったと考える。しかしそ

の女性的なるものの存在価値を知り、その魅力に引きつけられるヘクトルは、それだけ一層その価値の担い手たちの生存を、トロイアの男として守るために戦わねばならない、と感じた筈である。ヘクトルはこの矛盾を終始生きてゆかねばならなかった。『イリアス』第6歌において彼が最後に口にする言葉も、再びゼウスがアカイア勢をトロイアから撃退し、自由を祝うことを許し給うかも知れぬとの、幻の可能性への期待の表明であった。

## 要旨

「戦さは男の仕事、このイリオスに生を享けた男たちの皆に、とりわけわたしにそれは任せておけばよい。(6. 492-3)」——これはヘクトルが妻アンドロマケに、「機を織れ」と勧告した直後に発したあまりにも有名なセリフである。機を織るのは女性の典型的な仕事であり、戦さは男性に課せられた固有の役目だというのである。しかし『イリアス』第6歌の有名な「ヘクトルとアンドロマケの語らい」の場をつぶさに観察するに、二人のありようは男と女の硬直した関係に終始しているとはいえない。ヘクトルの世界はアンドロマケによって、そして彼女に先立ち、ヘカベとヘレネ（とパリス）によっても、つまり女性的なるものによって次第に影響され、浸潤されてゆくように思われる。

二人の出会いの場は、男の世界と女の世界の境界線たるトロイア城のスカイア門である。アンドロマケは「万一あなたを失うことになったら、墓の下に入る方がずっとましだとわたしは思っています (6. 410-1)」と夫に迫る。他方ヘクトルは常に第一線で戦えと教えられてきたという。ヘクトルの言動を支配している名誉と恥の念の背後には、トロイア陥落の日が近いとの予感があった。この運命感、突きつめて言えば、人間は皆死すべき者である、という生の感覚は、女性にも等しくあった。しかしそれに対処する仕方が、男と女では違っていた。

スカイア門でアンドロマケに相對しているヘクトルは、彼女の存在そのものが発する女性固有の内的力に感応したのか、あるいはそれに先立つヘカベ、パリス、特にヘレネとの出会いと折衝に次第に影響されたということもあってか、彼の男性性を規定する恥と名誉を相對化する視点をすでに獲得し始めていた。彼はトロイア陥落後、妻に襲いかかる悲惨を想像し、次のように言う。「わたしはそなたが敵に曳かれながら泣き叫ぶ声を聞くより前に、死んで盛り土の下に埋められたい。(6. 464-5)」この二行は明らかに、上に言及したアンドロマケのあの死の希求(6. 410-1)を受け、

それを引き継いだものである。ヘクトルはここで妻に限りなく近く寄りそい、ついに彼女の言葉（女性の言葉）を用いて、彼女の心の琴線に触れたのである。

しかしこの女性的なるものの価値を知り、その魅力に引きつけられるヘクトルは、それだけ一層、その価値の担い手たちの生存をトロイアの男として守るために、「戦は男の仕事」の理念に立ち戻らざるをえない。ヘクトルはこの矛盾を終始生きてゆかねばならなかった。

